資　料

◎目次

1　各単元の課題、各授業でのねらい一覧

2　第二学年「お手紙」学習指導案

3　第四学年「ごんぎつね」学習指導案

4　第六学年「やまなし」学習指導案①

5　第六学年「やまなし」学習指導案②

長期研修員

川口　舞

☆各単元の課題☆

	お手紙（第二学年）	ごんぎつね（第四学年）	やまなし（第六学年）
単元の課題	自分が感じたことが伝わるように、音読劇をしましょう。	登場人物の行動や気持ちの変化を捉えながら、ごんぎつねについて伝え合おう。	作品の世界を捉え、自分の考えを明確にしながら、宮沢賢治の作品世界を紹介しよう。

◎各授業でのねらい一覧表◎

※本時のねらいと併記されている☆はその時間に扱う疑問である。

時間	お手紙（第二学年）	ごんぎつね（第四学年）	やまなし（第六学年）
1	学習の見通しをもとう。	「ごんぎつね」を読み、初発の感想を書こう。	「イーハトーヴの夢」を読み、宮沢賢治の考えを知ろう。
2	「お手紙」を読み、初発の感想を書こう。	初発の感想から出た疑問を解こう（その1）。 ☆なぜ、ごんはいたずらばかりするのか	「やまなし」を読み、初発の感想を書こう。
3	初発の感想から、謎を解こう（その1）。 ☆かえるくんはなぜ、がまくんに今まで手紙を書かなかったのか	初発の感想から出た疑問を解こう（その 2）。 ☆なぜ、ごんはいたずらしていたのに、変わっていったのか	初発の感想から出た疑問を解こう（その1）。 ☆なぜ、不思議な感じがするのか
4	初発の感想から、謎を解こう（その2）。 ☆かえるくんはなぜ、がまくんに手紙を書いたことを言ったのか	初発の感想から出た疑問を解こう（その3）。 ☆なぜ、神様だと思われても、兵十のところにくりや松たけを持って行ったのか	初発の感想から出た疑問を解こう（その2）。 ☆なぜ、宮沢賢治は不思議な作品を書いたのだろうか
5	初発の感想から、謎を解こう（その3）。 ☆かえるくんはなぜ、かたつむりくんに手紙を届けてもらったのか	初発の感想から出た疑問を解こう（その4）。 ☆なぜ、ごんが最後の場面で兵十の家に来た時、兵十はいたずらをしに来たと決めつけていたのか	「やまなし」で考えたことをより深くまとめよう。 ・登場人物の役割 ・作品のしくみ ・題名の意味
6	初発の感想から、謎を解こう（その4）。 ☆かえるくんとがまくんはなぜ、四日も待っていたのか	作品を通して思ったこと、考えたことについて自分の考えをまとめよう。 ・中心人物の変化（ごんの変化） ・登場人物の変化（兵十の変化） ・作品のしくみ（クライマックス、結末）	いろいろな観点から見た「やまなし」を知ろう。

7	音読劇の準備をしよう。 ・かえるくんは・・・ ・がまくんは・・・ 音読する人物はどんな人物？	「ごんぎつね」について語り合おう会をしよう。	ほかの宮沢賢治作品を読んで、作品の世界をリーフレットにまとめよう。
8	音読劇の練習をしよう。	ほかの新美南吉の作品を読んでみよう。	学習のまとめをしよう。
9	音読劇をしよう。	ほかの新美南吉の作品を読んでみよう。	
10	学習のまとめをしよう。	学習のまとめをしよう。	

※ピンク色になっている授業では、読みの観点を選択し自力読みをしていく。

※オレンジ色になっている授業では、考えを広げ深めるために交流をしていく。

四角の枠の中は、自力読みをしてきた読みの観点から、広げ深めるために児童と見いだした読みの観点。

第二学年「お手紙」学習指導案

1　単元名　音読劇をしよう
教材名　お手紙

2　本時の展開（３／10）

(1)　**ねらい**　初発の感想に含まれる疑問を解くことを通して、自分の考えをもつことができる。

(2)　**準　備**　教師：教科書本文掲示用（拡大版）、読みの観点表、教科書挿絵、カラーペン
児童：ワークシート、前時までのワークシート

(3)　**展　開**

学習活動 ・予想される児童の反応	時間	○指導上の留意点及び支援 ◇評価
1　本時の学習課題をつかみ、追究の見通しをもつ。 〈本時のめあて〉 初発の感想から出た疑問を解きながら、自分の考えをもつことができる。 かえるくんはなぜ、がまくんに手紙を書いたことを言ったのか。 ・先に話したら楽しみがなくなるのに。 ・もったいない。	5分	○前時で「かえるくんはなぜ、がまくんに今まで手紙を書かなかったのか」という疑問を解いたことを振り返れるようにする。 ○かえるくんががまくんに手紙のことを話してしまうところまで、音読をさせる。 ○音読をした後、教科書挿絵を使って、場面の順番を確認する。 ○本時の疑問は「かえるくんはなぜ、がまくんに手紙を書いたことを言ったのか」だということを確認する。 ○前時で会話や気持ちの読みの観点から叙述を見付けていったことを本時も使えるように確認する。
［学習課題］　初発の感想から出たなぞを解こう（その３）。		
2　本文のどのあたりに本時のなぞが関係するのかを読みの観点から確認し、探す。 ・「いやだよ」 ・「ぼく、もうまっているの、あきあきしたよ」 ・「そんなこと、あるものかい」 ・「ぼくにお手紙をくれる人なんて、いるとは思えないよ」 ・「ばからしいこと、言うなよ」 ・「今まで、だれも、お手紙くれなかったんだぜ。きょうだって同じだろうよ」 「かえるくん、どうして、きみ、ずっとまどの外を見ているの」 ・「でも、来やしないよ」	3分	○教科書の全文シートを活用して、全文が見えるように教室の側面に掲示しておき、本時の疑問がどのあたりになるかの検討をつけさせる。 ○がまくんの家での様子を表している挿絵を（窓の外をのぞくかえるくん、ベットで昼寝をしているがまくん）一緒に掲示し、どの場面かを確認する。 ○前時に使った会話の読みの観点に気を付けて探すよう促す。そこから本時の疑問ががまくが繰り返し言っている会話にヒントがあることに気付けるようにする。 ○がまくんの文末表現にがまくんの気持ちの強さが表れていることが分かるように、大げさに音読して見せる。（気持ちの読みの観点から） ○ずっと手紙がこないと強く言っていたがまくんの様子が変わるがまくんの会話に気付けるようにすることで、がまくんの気持ちが変化したことを捉えられるようにする。 （気持ちの変化の読みの観点から） ○自分の考えをなかなかまとめられない児童には、

3　会話や様子の読みの観点を基に読み進めた叙述から、自分の考えをまとめる。	7分	どの叙述から読み進められるか、考えられる叙述を探せるように個別に助言する。
4　全体で考えを交流する。 ・がまくんのかなしい顔を見ていたくないから。 ・かえるくんは親友のがまくんに喜んでほしかったから。 ・かえるくんが何回言ってもがまくんがおきてこないから。 ・なかなかがまくんが手紙がくることを信じてくれないから。 （児童の経験を聞くと･･･） ・手紙って、もらうとうれしいよね。 ・○○ちゃんから手紙をもらったことある！ ・ぼくは△回、手紙をもらったことあるよ！ ・幼稚園の先生からの手紙がポストに入っていてうれしかった。 ・楽しみなことって、待ってる時がわくわくするよね。 ・サンタクロースのプレゼントが何かを考えるのって、わくわくする！	２０分	○「かえるくんはがまくんにどうなってほしかったのか」ということを考えさせ、親友のがまくんに喜んでもらえるようにしたことなんだと気付けるようにする。 ○「かえるくんとがまくんの喜びは何か」という発問をし、手紙をもらうことなのか、手紙の内容を知ることなのか、手紙を一緒に待つことなのかを考えられるようにする。 ○次時につながるように、二人が何を喜んでいるのかについて、児童の経験と結び付けながら、全体で交流できるようにする。 ◇初発の感想に含まれている疑問について、叙述を見付け、自分の考えをもつことができたか。 （ノート）【読む】 ◇交流を通して、自分の考えに他者の考えを付け加え、再考し、自分の考えを練り直していたか。 （交流観察・ノート）【読む】 ○音読劇につなげるために、本時で取り上げたがまくんとかえるくんの会話をがまくんとかえるくんの気持ちになって、全体で音読させる。
5　本時のまとめをする。 ・がまくんが喜んでくれてよかった。 ・かえるくんもがまくんも笑顔になったからよかった。	１０分	○全体で交流し、様々な考えを聞いたことを受けて、本時の疑問に対して、自分はどう考えるのか、登場人物の気持ちになって考えられるよう再考を促す。 ○お互いの考えを共有するために、ペアで考えを伝え合う場を設定する。

3　板書計画

○／△　「お手紙」

め　しょはつのかんそうから出たなぞをとこう（その二）。

☆かえるくんはなぜ、がまくんに手紙を書いたことを言ったのか。

窓の外を
のぞく
かえるくん
の挿絵

ベットで
昼寝をして
いる
がまくん
の挿絵

会話・様子・さし絵

○なぞはどこの本文から？

・「いやだよ。」

・「ぼく、もうまっているの、あきあきしたよ。」

・「そんなこと、あるものかい。」

・「ぼくにお手紙をくれる人なんて、いるとは思えないよ。」

・「ばからしいこと、言うなよ。」

・「今まで、だれも、お手紙くれなかったんだぜ。きょうだって同じだろうよ。」

・「かえるくん、どうして、きみ、ずっとまどの外を見ているの。」

・「でも、来やしないよ。」

かわった？

7回も手紙がこないって言ってる！

「だって、ぼくがきみにお手紙出したんだもの。」
「きみが。」

窓辺で話している
かえるくんとがまくんの
挿絵

じ・がまくんのかなしい顔を見ていたくないから。

・親友のがまくんによろこんでほしかったから。

・かえるくんが何回言ってもがまくんがおきてこないから。

・なかなかがまくんが手紙がくることをしんじてくれないから。

ま　・がまくんがよろこんでくれてよかった。

・かえるくんもがまくんもえがおになってよかった。

第四学年「ごんぎつね」学習指導案

1　単元名　物語を読んで、考えたことを話し合おう
教材名　ごんぎつね

2　本時の展開（４／10）

(1)　**ねらい**　初発の感想に含まれる疑問を解くことを通して、自分の考えをもつことができる。

(2)　**準　備**　教師：教科本文掲示用（拡大版）、読みの観点表、カラーペン
児童：読みの観点表、前時までの振り返り

(3)　**展　開**

学習活動 ・予想される児童の反応	時間	○指導上の留意点及び支援 ◇評価
1　本時の学習課題をつかみ、追究の見通しをもつ。 〈本時のめあて〉 初発の感想から出た疑問を解きながら、自分の考えをもつことができる。 なぜ、ごんはいたずらをしていたのに変わったのか。 ・どこから変わった？	2分	○前時までに読みの観点を使って解いてきて、有効だった読みの観点について振り返らせる。 （場面、様子、気持ち、行動） ○初発の感想で「ごんのつぐない」について書いていた児童にどんな初発の感想を書いていたのかを発表させる。 ○学習課題と本時の疑問を児童と共に確認し、児童にもノートに記入させる。 ○いたずらをしていたが、ごんがどこから変わったのか探すよう促す。
［学習課題］　初発の感想から出た疑問を解こう（その２）。		
2　本文のどのあたりに本時の疑問が関係するのかを読みの観点から確認し、探す。 ・今日はなんだかしおれています。 ・ごんはあなの中で考えました。「あんないたずらしなけりゃよかった」 ・おれと同じ一人ぼっち。 ・ごんはうなぎのつぐないにいいことをしたと思いました。 ・「かわいそうに兵十はいわし屋にぶんなぐられてあんなきずまでつけられたのか」 ・うなぎを川に投げたり、いわしを投げ入れたり、くりや松たけを･･･なんか変わっていってる？	3分	○教科書の全文シートを活用して、全文が見えるように教室の側面に掲示しておき、本時の疑問がどのあたりになるかの検討をつけさせる。 ○本時の疑問を解くために、ごんが変わっていったことに関係する叙述を教科書に線を引かせ、全体で共有する。 ○前時に使った気持ち、行動の読みの観点を基に探すよう促す。そこから本時の疑問を解くには、ごんの気持ちの変化や行動の変化が表れている叙述がヒントとなることに気付けるようにする。 ○ごんのいたずらがつぐないに変化していったことに気付けるように、今までしてきたいたずらにはどんなものがあるか、いたずらの具体的な内容やその時のごんの気持ちや行動を確認する。 （うなぎ→いわし→くりや松たけ）
3　読みの観点を基に読み進めた叙述から、自分の考えをまとめる。	7分	○前時のごんと比べて、違うところはどんなところか、何をきっかけにして変わっているのかに気付けるようにし、自分の考えをまとめるように促す。

4　全体で考えを交流する。 ・ごんはうなぎを取ってしまい、兵十はおっかあにうなぎを食べさせることができなかった。 兵十とおっかあに悪いことをしたと思った。 ・お葬式を見て、いたずらをつぐないでうめた。 ・ごんは穴の中で考えて、いわしを投げ入れたが、それではだめだと、兵十の傷や兵十の言っていることを聞き、自分のおろかさを知り、いろいろなくりや松たけを渡して謝りたかったのだと思う。 ・いわし売りにまでけがをさせられて全部ぼくのせいだとごんは思った。そして謝りながらいつもいっぱいの食べ物をあげたと思った。 ・兵十が一人ぼっちになることで自分と同じだと思い、くりや松たけをもってきたのだと思う。 ・兵十も一人ぼっちでかわいそうで、自分と同じ思いをさせたくなかった。 ・いたずらは悪いことと思った。 ・何回も何回もつぐないたかった。	２３分	（様子や会話の読みの観点から） ○いたずらからつぐないに変化したのが分かる叙述を探し、自分の考えをまとめるように促す。 （気持ちや行動、情景描写の読みの観点から） ○ごんの一方的な気持ちの変化であることが分かるように、ごんの話している内容は独り言だということに触れ、ごんの独り言の内容は本当のことなのだろうか、それとも「ちがいない」という言葉が書かれているから、ごんの想像なのか、考えてみるよう促す。 ○ごんの心情の変化が行動に表れていることに気付けるように、いわしは投げこみ、くりや松たけはそっと物置の方へ回って置いたという行動描写の変化を捉えられるようにする。 ○つぐないにも「変化」があったことに気付かせ、つぐないの「変化」のほかに「変化」したものは何かを考えさせる。 ○前時に使った様子の読みの観点から、ごんの気持ちの変化を表している情景描写があることに気付けるようにし、情景描写という言葉を伝える。 （例：墓地には、ひがん花が、赤いきれのようにさき続いていました。･･･人々が通った後には、ひがん花が、ふみ折られていました。） ◇初発の感想に含まれている疑問について、叙述を見付け、自分の考えをもつことができたか。 （ノート）【読む】 ◇交流を通して、自分の考えに他者の考えを付け加え、再考し、自分の考えを練り直していたか。 （交流観察・ノート）【書く】
5　本時のまとめをする。 ・兵十に何回もつぐなって、自分のせいだと反省して謝りたかったのだと思う。 ・いたずらはやるのは楽しいが受けるのはつらいということを痛感して兵十を助けて心を楽にした。裏を返せば、自分と同じ思いをさせないようにしていった。 ・兵十も一人ぼっちになりかわいそうだと思い、謝りたい気持ちがあった。いたずらを悪いことだと知って、つぐないたいと思った。 ・ごんのいたずらはつぐないに変化し	１０分	○全体での考えを交流した後、自分の考えに付け加えたいこと、新しく考えたことなど、自分はどう考えるのか、再考するよう促す。 ○お互いの考えを共有するために、ペアで考えを伝え合う場を設定する。 ○次時以降の疑問を解明していくことの伏線になるように、ごんの気持ちをずっと追っているが、兵十の気持ちに変化があったかどうかを考えてみるよう促す。 ○ごんの気持ちは変化してきているが、兵十の気持ちに変化は起きていないことを本時に取り上げた叙述から確認し、二人の感覚のずれについて、次時以降考えていくことを伝える。

て、ごんの気持ちも変化していったことが分かった。		

3　板書計画

○／△　「ごんぎつね」　新美南吉

め　初発の感想から出たぎもんを解こう（その二）

☆なぜ、ごんはいたずらをしていたのに変わったのか。

様子・会話・気持ち・行動 ⇩ 変化

◎いたずら・・・うなぎ→いわし→くり、松たけ

○ぎもんはどこの文から？

・今日はなんだかしおれています。

・ごんはあなの中で考えました。

・おれと同じのひとりぼっち。

・ごんはうなぎのつぐないにまず一ついいことをしたと思いました。

・「かわいそうに兵十はいわし屋に・・・」

じ

・うなぎを取って兵十とおっかあに悪いことをしたと思った。

・そう式の様子を見て、つぐないたいと思った。

・いわしをあげたら、兵十がけがをしていたから、くりや松たけをわたしてあやまりたかった。

・兵十もごんと同じひとりぼっちだから。

・いたずらは悪いことだと思った。

・何回も何回もつぐないたかった。

まとめ

・兵十に何回もつぐなって自分のせいだと反省してあやまりたかった。

・ひとりぼっちはかわいそうで、自分と同じ思いはさせたくない。

・いたずらはつぐないに変化して、ごんの気持ちも変化してしていったことが分かった。

第六学年「やまなし」学習指導案①

1　単元名　作品の世界をより深く読み味わう―宮沢賢治の世界展
教材名　やまなし

2　本時の展開（４／８）

(1)　**ねらい**　初発の感想に含まれる疑問を解くことを通して、自分の考えをもつことができる。

(2)　**準　備**　教師：教科書本文掲示用（拡大版）、読みの観点表、カラーペン
児童：読みの観点表、前時までの振り返り

(3)　**展　開**

学習活動 ・予想される児童の反応	時間	○指導上の留意点及び支援 ◇評価
1　本時の学習課題をつかみ、追究の見通しをもつ。 〈本時のめあて〉 初発の感想から出た疑問を解きながら、自分の考えをもつことができる。 なぜ、宮沢賢治は不思議な作品を書いたのだろうか ・賢治独自の表現がいろいろあったな。	3分	○前時に読みの観点を使って解いてきて、有効だった読みの観点について振り返らせる。 （登場人物・様子・音・会話・たとえ） ○前時で「なぜ、不思議な感じがするのか」という疑問を解いたことを振り返らせる。 ○賢治が作った造語や音、たとえなど独自の表現がたくさんあったから、不思議な感じがしたのだということをおさえる。 ○学習課題と本時の疑問を児童と共に確認し、児童にもノートに記入させる。 ○五月と十二月があるということ、「小さな谷川の底を写した、二枚の青い幻灯です」「私の幻灯は、これでおしまいであります」の額縁構造であることに触れておく。
［学習課題］　初発の感想から出た疑問を解こう（その２）。		
2　本文のどのあたりに本時の疑問が関係するのかを読みの観点から確認し、探す。 ・音の読みの観点から見ると、五月はゆらゆら、つぶつぶで、十二月はトブン①。 ・様子の読みの観点から見ると、五月はかわせみが魚を食べ、十二月はやまなしが落ちてくる②。 ・登場人物の読みの観点から見ると、五月のクラムボンは笑ったり、死んだりして、十二月のやまなしはおいしそうだ③。 ・たとえの読みの観点から見ると、五月はコンパスのように黒くとがっていて、十二月は遠眼鏡のような両方の目をというところがあった④。	7分	○教科書の全文シートを活用して、全文が見えるように教室の側面に掲示しておく。 ○五月と十二月があること、前時の叙述を出したときに、似たような叙述の繰り返しがあったことを振り返らせ、本時の読みの観点として比べさせる（対比）ことで、別の見方ができることに気付けるようにする。 ○五月と十二月の両方を比べる読みの観点から読み進められるように、関係する叙述を教科書に線を引かせ、全体で共有する。 前時で活用した読みの観点 ・音　・様子　・登場人物　・たとえ　・明るさ　・出来事 本時で見いだした読みの観点 ・比べる（対比）

3　読みの観点を基に読み進めた叙述から、自分の考えをまとめる。 4　全体で考えを交流する。 ・音の読みの観点から見ると、五月は軽い感じがして、十二月は重いもののように感じた①。 ・様子の読みの観点から見ると、五月は気味の悪いことがあって暗く感じ、十二月は五月より新しい表現がされていて、情景が輝いているように感じた②。 ・登場人物の読みの観点から見ると、五月は怖い感じがして、十二月は幸せな感じがした③。 ・たとえの読みの観点から見ると、五月は怖くて不安を感じて、十二月は優しい安心を感じて幸せに思った④。 （２で共有した叙述を順番に①～④を使って、考えを明記している。）	７分 １８分	○前時の読みの観点に、対比の読みの観点を併せて読み進められるようにすることで、付け加えられた考えをまとめられるようにする。 ○どの読みの観点から読み進めたのか、選んだ叙述、考えを伝えるよう促す。 ○交流中も自分の考えに付け加えたいこと、新しい発見など、気付いたことはメモを取るように伝え、本時のまとめをする際に自分の考えに生かせるようにする。 ○対比の読みの観点を追加して読み進められるようにすることで、前時より多くの叙述を基に自力読みができるようにする。 ◇初発の感想に含まれている疑問について、叙述を見付け、自分の考えをもつことができたか。 （ノート）【読む】 ◇交流を通して、自分の考えに他者の考えを付け加え、再考し、自分の考えを練り直していたか。 （交流観察・ノート）【読む】
5　本時のまとめをする。 ・五月の怖さと十二月の安心から、十二月の平和な世界を望んでいたから、題名がやまなしなのかと考えた。 ・五月の怖さは自然の厳しさで、十二月は自然の恵みを表していて、題名をやまなしにすることで、自然の恵みの大切さを伝えたかったのかと考えた。	１０分	○全体での考えを交流した後、自分の考えに付け加えたいこと、新しく考えたことなど、自分はどう考えるのか、再考するよう促す。 ○五月のかわせみと十二月のやまなしは対比できる関係なのに、なぜ題名が「やまなし」なのかということを、宮沢賢治の思いや願いや意図（「イーハトーヴの夢」を思い出させながら）と併せて考えをまとめられるようにする。 ○お互いの考えを共有するために、ペアで考えを伝え合う場を設定する。 ○交流を重ね、再考を繰り返しさせることで、自分の考えが広がり深まっていることを実感できるようにする。

3　板書計画

○／△　「やまなし」　宮沢　賢治

め　初発の感想から出た疑問を解こう（その二）。

☆なぜ、賢治は不思議な作品を書いたのだろうか。

音・様子・登場人物・たとえ・明るさ・出来事

比べる（対比）

○疑問はどこの文から？

（五月）

ゆらゆら・つぶつぶ

かわせみが魚を食べる

クラムボン

コンパスのように

（十二月）

トブン

やまなしが落ちてくる

やまなし

遠眼鏡のような

自

・音の読みの観点→五月は軽い感じ。十二月は重いもののよう。

・様子の読みの観点→五月は気味の悪いことがあって暗い。十二月は五月より新しい表現がされて、情景が輝いているよう。

・登場人物の読みの観点→五月は怖い感じ。十二月は幸せな感じ。

・たとえの読みの観点→五月は怖くて不安。十二月は優しい安心を感じて幸せ。

◎なぜ、題名がやまなしなのか。

まとめ

・五月の怖さと十二月の安心から、十二月の平和な世界を望んでいたから。

・五月の怖さは自然の厳しさで十二月は自然の恵み。自然の恵みの大切さを伝えたいから。

第六学年「やまなし」学習指導案②

1　単元名　作品の世界をより深く読み味わう―宮沢賢治の世界展
教材名　やまなし

2　本時の展開（５／８）

(1)　**ねらい**　「やまなし」で考えたことをより深くまとめることができる。

(2)　**準　備**　教師：教科書本文掲示用（拡大版）、読みの観点表、カラーペン
児童：読みの観点表、前時までの振り返り、前時までの自分の考え

(3)　**展　開**

学習活動 ・予想される児童の反応	時間	指導上の留意点及び支援・評価 （◎努力を要する児童生徒への支援　◇評価）
1　本時の学習課題をつかみ、追究の見通しをもつ。 〈本時のめあて〉 「やまなし」で考えたことをより深くまとめることができる。 ・今までは音や対比の読みの観点から考えてきたな。	3分	○前時で「なぜ、宮沢賢治は不思議な世界を書いたのか」という疑問を解いたことを振り返らせる。 ○宮沢賢治の思いや願いや意図が何なのかということを考えるために、題名がなぜ「やまなし」かということに触れたことを振り返らせる。 ○初発の感想に含まれる疑問に対しての自分の考えは叙述を基にもてたことを確認し、宮沢賢治の作品世界を紹介するには、作品全体を見て、より深く「やまなし」について考えることが必要であることを説明する。
［学習課題］　「やまなし」で考えたことをより深くまとめよう。		
2　前時までの読みの観点を複数活用すると、どんな読みの観点が見いだせるかを話し合う。 ・登場人物はいろいろ出てきたけど、それぞれを比べただけだったな。登場人物をまとめて考える読みの観点だと何か違う考えになるかもしれない。 ・前回、「やまなし」は額縁構造になっていると聞いたけど、「やまなし」全体から見ると、五月と十二月の場面に何か違う考えや関係はあるのかな。 ・題名の意味はもっとたくさんの意味合いがありそうだ。	7分	○前時までは、表現技法の読みの観点と対比の読みの観点から読んでいたことに気付かせ、作品全体を見て、より深く「やまなし」について考えるにはどんな読みの観点が考えられるか、問いかける。 ○交流を繰り返すことで、自分の考えと友達の考えを比べて、新しい発見に気付いていたことを振り返らせる。また、複数の読みの観点を活用することで、作品全体を見られ、より深く作品についてまとめられることに気付かせる。 ○次時以降に宮沢賢治の作品世界を紹介するために、読みの観点を複数活用することで、「やまなし」全体をより深くまとめられないかと投げかけ、グループで話し合い、考えられる読みの観点を全体で共有する。 ・登場人物の役割 （かにの兄弟、親子、かわせみ、やまなしなど） ・作品のしくみ（五月と十二月の場面全体の意味） ・題名の意味（題名は何を象徴しているのか）

3　選んだ読みの観点から観点がよく表れている叙述を見返す。	3分	○三つのうち、一つの読みの観点から読み進め、「やまなし」全体の自分の考えをまとめられるように、根拠となる叙述を教科書に線を引かせる。
4　考えをまとめていく。	7分	
5　同じ読みの観点同士、違う読みの観点同士で複数回グループで交流をする。 （同じ読みの観点同士の交流） ・同じ読みの観点から読んでいるから、考えも似ているものが多いな。 ・でも、よく比べると、選んでいる叙述が違うよ。ほかの叙述からも考えられるなんて、新しい発見だ。ほかの叙述もあるかな。探してみよう。 （違う読みの観点同士の交流） ・違う読みの観点から読んでいるから、考えは違うはず。･･･あれ？考えが似ている･･･。どうして？叙述を比べてみよう。これも違う。考えは似ているのだから、つなげられるものがあるはず。ほかにもないか叙述を探して考えてみよう。 ・別の違う読みの観点から読んで、この考えになって、この叙述からの理由になるのは初めて知った。どんどん考えが広がっていくな。	２０分	○選んだ読みの観点、選んだ叙述、自分の考えを比べ、共通点や相違点を見いだせるようにする。 ○新しい発見、自分の考えにつなげて考えられる叙述や考え、付け加えられる考え、初めて知ったことなど、気付いたことをメモをしながら交流するよう促す。 ○全体での考えを交流した後、自分の考えに付け加えたいこと、新しく考えたことなど、自分はどう考えるのか、再考するよう促す。 ◇読みの観点から「やまなし」の作品全体について読み、自分の考えをまとめることができたか。 （ノート）【読む】 ◇交流を通して、自分の考えに他者の考えを付け加え、再考し、自分の考えを練り直していたか。 （交流観察・ノート）【読む】
6　本時の振り返りをする。 ・違う読みの観点からの友達の考えを聞くと、新しい見方ができて、自分の考えが広がった。 ・友達の考えから新しい発見をたくさんできて楽しかったし、宮沢賢治の作品世界をより知りたくなった。	5分	○本時でまとめた考えをリーフレットを作成する際に活用していくことを伝える。 ○次時から宮沢賢治のほかの作品を読んでいくことを伝え、意欲につなげる。

3　板書計画

○／△　「やまなし」　宮沢　賢治

め　「やまなし」で考えたことをより深くまとめよう。

☆作品全体を見るには、どんな読みの観点？
・かにの兄弟、親子、かわせみ、やまなし
　↓登場人物の役割
・五月と十二月の意味
　↓作品のしくみ
・題名は何を象徴しているのか
　↓題名の意味

○選んだ本文
○自分の考え

◎同じ読みの観点
◎違う読みの観点

・共通点、相違点
・新しい発見
・自分の考えにつなげられる本文、考え
・付け加えられる考え

振り返り
・違う読みの観点からの友達の考えを聞くと、新しい見方ができて、自分の考えが広がった。
・友達の考えから新しい発見をたくさんできて楽しかったし、宮沢賢治の作品世界をより知りたくなった。

○交流前の考え　●交流後の考え　→実践授業で出た児童の考え

○登場人物の観点から見て、「黒い丸い大きなものが･･･上がってきました」を選びました。ここから、「やまなし」は農家の人にとって嬉しい時悲しい時を表していると思います。きっと悲しいことがあっても嬉しいことがあるから、農家をがんばってほしいという思いがあるのだと思いました。

●友達の登場人物の観点から観点は同じで考えが違いました。五月は現実、十二月は理想のところから、付け加えると宮沢賢治の世界は農業の厳しさ、嬉しさを表していると思いました。

○作品のしくみの観点から見て、「光の黄金のあみは･･･流れました」と「まもなく水は･･･集まりました」から、五月は音の表現がこの先何が起こるか分からない危険で、十二月はサラサラもかもかなどで、この先はいいことが起きているというような希望だと感じました。宮沢賢治さんはきっと、悪いことも起きれば、いいこともあると、不幸と幸せの現実を伝えたかったと思います。

●友達の題名の観点からの「三つのかげ法師が･･･追いました」の所に仲良しでいいと思いました。考えに付け加えると、親子仲良しということは幸せ、ということは、結果幸せは十二月にあると思い、宮沢賢治の世界は、悲しみや喜び、不幸や幸運があるということだと感じ、必ず幸せはいつもないということも思いました。

○題名の観点から見て、「その横歩きと底の黒いかげ法師が･･･追いました」を選びました。そこから私は「やまなし」という題名は十二月の楽しそうな雰囲気と平和な世界から宮沢賢治さんが理想とする平和で幸せな世界の象徴としてつけた題名だと思います。

●友達の題名の観点から、観点は同じで考えが違いました。きっとやまなしのいいにおいでつつまれていたのだろうという所に「やまなし」が幸せを意味する考えが同じだと思いました。考えに付け足すと、宮沢賢治さんの世界は理想の幸せな世界です。